

論理畧說

菊池大麓編述

卷下

仁8

137

3止



菊池大麓編述

論理略說

版權免許

同盟舎



論理略說卷之下

目錄

- 第十三編 歸納推理法
- 第十四編 觀察試驗
- 第十五編 歸納推理ノ規則
- 第十六編 定量歸納法
- 第十七編 經驗定綱、類似法
- 第十八編 誤謬推理法



成
第一卷
目錄終

論理略說

卷之下

目錄

同盟

舎

目録

第十八編

論理略説

第十九編

論理略説

第二十編

論理略説

第二十一編

論理略説

第二十二編

論理略説

第二十三編

論理略説

目録

論理略説卷之十

論理略説卷之下

五當考 菊池大麓 編述

第十三編

歸納推理法

推理ノ方法ニ二大別有リテ一ヲ演繹法ト云ヒ

一ヲ歸納法ト云フ上卷三丁以下演繹法ハ已知

ノ述意(前提)ニヨリテ以テ新述意(断言)ヲ推断ス

ルノ方法ニシテ其肝要ナルヲ固ヨリ論無シト

雖歸納法ハ又一層緊要ナル者ノ如シ何トナレ

バ某述意ノ真ナル時ハ何述意ノ真ナルヤヲ推

断シ得ルハ演繹法ノ本分ナリト雖此推断ノ基

本即前提ト為ル所ノ述意ヲ得ルハ則歸納法ニ由ルニ非ザレバ能ハザレバナリ故ニ唯演繹推理ニ由ルノミニテハ何事ヲモ知了スルヲ能ハズ是レ先ツ前提ト為ル可キ述意ヲ得タルノ後ニ非ザレバ此方法ヲ行フニ由莫ケレバナリ然ラバ則其前提ヲ得ルハ當ニ何等ノ方法ニ由リテス可キヤ他無シ亦唯正當ニ歸納推理ヲ行フノミ而シテ之ヲ行フノ初步ハ我が五官ヲ以テ身邊四周ノ事物ヲ觀察スルニ在リ則人生知識ヲ得ルノ正當手段ハ之ヲ舍テ、

更ニ他術無キナリ然リ而シテ世多ク悟ラズ夫ノ大家先生ノ說或ハ古來遺傳ノ言ノ如キハ皆其真否ヲ查考セズシテ漫ニ憑信シ掲ゲテ前提ト為シ演繹推理ヲ行ヒ以テ真ノ知識ヲ得可シト思フ者無キニ非ズ亦惑ハズヤ西洋諸國ニ於テモ往時學者ノ猶此妄想ヲ去ラザリシ間ハ更ニ學術ノ進步無カリシナリ然ルニ第十五世紀ノ末ニ至リテ卓識通明ノ學士數人輩出シ始テ世ニ唱ヘテ曰ク先哲ノ言ト雖未

必皆真ナリトス可カラズ吾人ハ親シク宇宙ノ
 顯象ヲ觀察シ或ハ特ニ試験ヲ行フテ以テ論説
 ノ真偽ヲ判断セザル可カラズト是ニ於テ頓ニ
 學術ノ一大局面ヲ新換シ駸々乎トシテ進デ已
 マズ以テ今時ノ盛ヲ致ス者ハ實ニ此類學士輩
 出ノ日ニ胚胎セリト謂フ可シ太古希臘ノアリ
 ストトトルハ有名ノ理學者ナルガ其説ニ凡ソ
 大物ハ小物ニ比スレバ其地ニ墜ルト速ナリト
 此言一タビ出デシヨリ學者之ヲ信ジテ絶エテ
 疑フ者無ク二千年ノ久シキトテ歴テ第十六世

紀ノ始ニ至リ以太利人ガリレオ高塔ノ頂上ヨ
 リ試ニ大小ニ球ヲ墜シテ以テアリストトトル
 ノ言ノ真ナラザルヲ徴シタリ斯克容易ニ其真
 偽ヲ徵明シ得可キトナルニガリレオノ前ハ一
 人モ疑ハズ物体ハ必大小ニ因リテ地ニ墜ル遲
 速有ル者トシテ推論セリ夫レ斯ノ如ク推理ノ
 初步ヲ誤リテ其前提已ニ虚偽ナレバ何如ニ演
 繹推算法ヲ究ムルモ其好結果ヲ得ザルハ亦宜
 ナラズヤ直ニ之ヲ宇宙ノ顯象ニ質シテ以テ論
 説ノ真偽ヲ判スルハ是レ歸納推算法ノ精神ニ

シテ諸種理學科ノ現今ノ地位ニ進ミタルハ皆
 全ク此精神ノ發動ニ由ラザルハ無キナリ近時ハ
 社會學、政治學等ノ如キモ亦皆此精神ニ資リ歸
 納推理法ヲ以テ研究セザル可カラズトスル者
 漸ク多シ然レモ概ネ此等ノ學科ハ猶未舊習ヲ
 蟬脫スルヲ能ハズ古傳若シクハ大家ノ說ノ其
 歸納推理法ニ由リ得タルニ非ラザル者ヲ確然
 動カス可カラズトシテ此前提ヨリシテ推論シ
 去ル者十ノ八九ニ居レリ豈嘆ゼザル可ケンヤ
 歸納法ニ二種アリ一ヲ完全歸納法ト名ツケ一

ヲ不完全歸納法ト名ツク完全歸納法トハ其斷
 言ニ述ブル所ノ一切ノ物ヲ查究シタルヲ云フ
 例ヘバ一圖書館中ノ書籍ヲ盡ク調査シテ皆漢
 書ナレバ則此ノ圖書館ニ在ル書籍ハ一切漢書
 ナリト断定スルガ如シ或ハ金星、水星、地球等總
 テノ遊星ヲ觀察シテ皆其太陽ヲ繞リ橢圓形ノ
 軌道ヲ行キ西ヨリ東ニ向テ廻轉スルヲ知リ得
 レバ「巴」ニ發見シタル遊星ハ皆太陽ヲ繞リ橢圓
 形ノ軌道ヲ行キテ西ヨリ東ニ廻轉スト断定ス
 ルハ是レ完全歸納法ナリ不完全歸納法トハ其

断言ニ述ブル所ノ一切ノ物ヲ查究シ盡サバ、ルヲ云フ例ヘバ、人ハ皆死ヲ免レズト断定スルハ、不完全歸納法ナリ。此時ハ固ヨリ人類ノ始メヨリ後世ニ至ルマデ一切ノ人ニ就テ一々查究スル「能ハズ若シ完全歸納法ヲ用井ント欲セバ、人種ノ盡キタル後ニ非ザレバ不可ナリ。完全歸納法ハ已ニ查究シテ十分知了セル者ヲ簡略ニ断言ニ述ブルマデナリ、不完全歸納法ニハ已ニ查究シタル所ヨリシテ其未查究セズ或ハ查究スル「能ハザル所ニ及ボスナリ、故ニ演

繹法或ハ完全歸納法ニ由リテ得ル所ノ断言ハ前提真ナレバ、確實疑フ可カラザル者ナレ、凡不完全歸納法ニテ得ル所ノ断言ハ是ノ如ク、確然必定セル者ニ非ズ、然レ、凡其方法宜ヲ得レバ、由リテ得ル所ノ断言モ亦殆確定セル者ト認働スヲ得可シ、人ハ皆死ヲ免レズト云フガ如キハ、將來ニ不死ノ人無キ「未必ス可カラズト雖姑且確實ナル者ト認働シテ可ナラン、夫ノ万物引牽論ノ如キモ、蓋亦然リ、但シ唯其一部分ヲ查究シテ由リテ全体ニ論及シ得ルノ理ハ、今此ニ詳論

近世學科上ノ一大發見ト稱スル者大抵此ノ不
完全歸納法ニ由ラザルハ無シ其貴重固ヨリ稱
賛ヲ待タザルナリ而シテ特ニ學科上ノミナラ
ズ人ノ世ニ處スル平生モ亦此ノ推理ヲ行ハ
極テ多シトス然レモ其方法ノ正ヲ得ルニ非ザ
レバ忽^チ誤謬ニ陥リ小ニシテハ身ヲ誤リ大ニシ
テハ國家ヲ亡スニ足ル畏レザル可ケンヤ故ニ
甚麼カ是レ正當歸納法タルヲ講明スルハ極メ
テ親切緊要ノ學ナリ

余ハ嚮ニ第一編ノ歸納推理ノ定義ヲ示シテ曰
ク歸納法ハ許多ノ件々ヨリシテ汎ク之ヲ總括
スル真事ヲ推定スルノ方法ナリト而シテ其之
ヲ實行シタル最好例ハ則諸種ノ理學科ニ在リ
而シテ理學科上ヨリ得來タル者ヲ造化ノ定綱
ト稱ス或ハ萬物法トモ云フ
今此定綱發見ノ次第ヲ考フルニ歸納法ハ左ノ
四段ヨリ成ルヲ見ル可シ

第一段 實事ノ搜聚
第二段 假設說

第三段

演繹推理

第四段

徵驗

第一段ニ於テハ偶然或ハ故意ノ觀察ニ因リテ以テ數多ノ實事ヲ搜聚スルヲ云フ此ノ間或ハ曩ニ已ニ歸納推理ヲ行テ得タル所ノ定綱ニシテ更ニ復推理ノ材料トナルコト有リ

第二段ニ於テハ右ノ實事ノ理由ヲ説明スルガ為ニ假ニ之ガ說ヲ設ケテ想像ノ定綱ヲ立ツ之ヲイホセシス假設說ト云フ

第三段ニ於テハ演繹推理ヲ行ヒ若シ假設說ヲ

シテ真ナラシメバ應ニ何如ナル結果ヲ生ジ來ル可キヤヲ推斷ス更ニ之ヲ云ヘバ假ニ想像シタル所ノ定綱果シテ真ナラバ必某ノ實事アル可シト推究ス

第四段ニ於テハ其應ニ生ズベク應ニ起リ來ルベシト推斷シタル結果實事ハ果シテ現出シ來ルヤ否ヲ查究センガ為ニ已ニ第一段ニ於テ得タル所ノ實事ニ比較シ或ハ新ニ觀察シ又特ニ試驗シテ而シテ其現迹若シ演繹推理ノ斷言(第三段)ト合同一致セザルトキハ是レ吾ガ假設說

第二段ノ真ナラザルヲ徴スルニ足ル是ニ於テ
 吾輩ハ又新ニ假設説ヲ立テ、以テ試ザル可カ
 ラズ此ノ間若シ或ハ演繹推理ノ斷言ノ二三實
 事ニ符合スル有ルモ未以テ假設説ハ必シモ真
 ナリト速了ス可カラズ尚數様ニ之ヲ試ミ充分
 ニ之ヲ徵驗シテ而後纔ニ始テ確實ナル説ト認
 做スヲ得ルナリ
 此ニニユートンガ万物引牽ノ定綱ヲ發見シタ
 ルノ順序ヲ述ベ以テ歸納推理法ノ四段ヲ説明
 ス可シ

凡ソ地上ノ物体ハ之ヲ支フル者無ケレバ地ニ
 墜ルハ太古ヨリ人ノ皆善ク知レル所ナリ昔ケ
 フレル獨國ノ有名ナル星學者ナリ一千五
 百七十一年生一千六百三十年死ハ數
 年間ノ觀察ニ因リテ遊星ハ皆橢圓形ノ軌道ニ
 循テ太陽ヲ繞ルコトヲ發見シタリ然レ此レ其
 何ノ理由有リテ然ルヤハ未説明スル能ハザリ
 シナリ以上第一段ニユートン
 一千六百四十二年生一千七百二
 十七年死ハ是等ノ實事ヲ熟考シ凡ソ物体ノ地ニ墜
 ルモ遊星ノ太陽ヲ繞ルモ皆同一ノ原理ニ因ル
 者ナラント想像シ則假ニ説ヲ設ケテ凡ソ萬物

ハ相互ニ引牽シ其引カハ物体ノ質量ト距離自
 乗ノ反數ニ比例スト言ヘリ是レ以テ物体ノ地
 ニ墜チ遊星ノ太陽ヲ繞ル所以ヲ説明スルニ足
 レリ(以上第二段)是ニ於テ演繹推理ヲ為シテ曰
 ク若シ此説果シテ真ナラバ月ト地球トノ距離
 ヲ以テ地球ノ引カヲ推算スルニ月ハ應ニ毎秒
 地ニ墜ルヲ十五尺ナル可シト(第三段)是ニ於テ
 其果シテ然ルヤ否ヲ査檢セザル可カラズ夫レ
 萬物ハ之ヲ阻ツル者有ルニ非ザルヨリハ直進
 シテ止ラザル者ナリ然ルニ月ハ直進セズシテ

地ヲ繞リ廻轉スルハ是レ常ニ地球ノ引カニ由
 リテ直進ノ行路ヲ轉變セラレ以テ地ノ方ニ墜
 ルナリ故ニニュートンハ月ノ動行ヲ觀察シタ
 ルニ毎秒地ノ方ニ墜ルヲ十三尺ニシテ其推算
 シ得ル所ト二尺ノ差アリ是ニ於テニュートン
 ハ其假設説ヲ斥ケタリ(第四段)後十五六年ヲ歷
 テ其推算ノ基(地球ノ大サ)ニ謬有ルヲ發見シ
 改メテ推算シタルニ果シテ觀察ト符合セル結
 果ヲ得タリ因リテ更ニ百方査究シ而後遂ニ之
 ヲ世ニ公セリ爾來此理ヲ以テ推斷スル所ハ事

論理田言 卷之十 附錄
皆實事ト符合セザル者無シ海王星ノ如キ其未
發見セザル前ニ既ニ此理ニ由リ其位置ヲ測算
シ以テ果シテ之ヲ發見スルヲ得タリ故ニ今日
ニ在リテハ萬物引牽ノ理ハ充分ニ確定シタル
者ト認做ス可キナリ
此一例ニ就キテ以テ歸納法ノ四段ノ用ヲ知ル
ニ足ル可シ尚編ヲ逐テ詳論セントス
第十四編 觀察試驗
一切ノ知識ハ悉皆經驗ノ結果ナリ經驗ニ因ラ
ズシテ唯心ノ作用ハミニテハ新知識ヲ得ルコ

能ハズ吾輩ハ推理力ヲ用井テ其已ニ知ル所ノ
實事ノ真義ヲ解釋シ因テ以テ能ク秘奧ヲ發覺
シ得ルノ故ニ歸納推理ノ初步ハ身邊四圍ノ
事物ヲ觀察スルニ在リ
觀察ニ二種有リ一ハ特ニ觀察ト称ス天然ニ現
出スル所ノ顯象ヲ諦視スルヲ云フ一ヲ試驗ト
称ス吾人ノ故意ニ設ケテ以テ生出セシムル所
ノ顯象ヲ觀察スルヲ云フ
天文學者ノ諸天体ノ
動行蝕經過等ニ於ケル如キハ即純正ノ觀察ナ
リ氣象學家ノ時々ニ晴雨寒暖ノ變ヲ記シ統計

論理田言 卷之四
學者ノ人口等社會ノ變化ニ於ケルモ亦同然ナリ若シ夫レ化學者ノ分析術ヲ行テ原素ヲ發見シ物理學者ノ排氣鐘ヲ用井テ空虚ヲ作ル等ハ皆試験ナリ
試験ハ吾人ノ故意ニ行フ者タルガ故ニ意ノ如ク事物ノ境遇ヲ變易シテ其生シ来ル所ノ結果ヲ觀察スルヲ得故ニ之ヲ施行シ得可キ場合ニ於テハ最親切ニシテ最効力有ル方法ナリ且隨時容易ニ試験ヲ設ケテ生出ス可キ顯象モ其天然ニ現出シ来タルヲ觀察セントスルモハ数月

若シクハ数年ノ久シキヲ待タザル可カラザル
有リ或ハ遠行ヲ要スル有ル可シ加之又絶エテ天然ニ生出シ来タラザル者有リ例ヘバ炭酸瓦斯ヲ壓逼シ寒冷ノ極ニ至ラシムレバ液体ト為リ又固体ト為ル是天然ニ於テ未曾テ見ザル所ナリ其他新物質ヲ發見スル如キ多クハ試験ニ由ル然レモ亦試験ヲ行フ能ハザル場合有リ例ヘバ天文學者ノ如キハ試ニ天体ノ動行ヲ左右スル有能ハズ又生物學ハ多クハ試験ヲ施ス可カラズ政治學社會學等ノ如キ尤然リトス

論理學 卷之四
是ノ如キ場合ニ於テハ專ラ觀察ニ由リテ以テ
實事ヲ搜聚スルノ外ハ眞確ナル知識ヲ得ルノ
方法有ル無シ
銳敏精密ナル觀察ニ種ヲ併セテヲ善クスルコ
ハ獨學術上ノミナラズ日常處事接物ノ間ニ在
リテモ極メテ緊要タリト雖其術タル素ヨリ確
固一定ノ規矩有ル無ク唯練習ノ久シキ以テ其
妙ニ達スルヲ得ルナリ而シテ之ヲ練習スルハ
理學諸科ヲ修ムルニ若クハ無シ是レ普通教育
課目中ニ理學科ヲ置カザル可カラザル一大理

論理學 卷之四
由ナリ論理學ハ觀察ノ方法ヲ教フルノ學ニ非
ズ但此ニ一ノ警戒有リ曰ク眞ニ感覺シタル事
ト此ニ由リテ心中ニ推斷シタル事トハ分明ニ
辨別シテ混同ス可カラズト世人唯五官ニ由リ
テ感覺シタル事ト其之ヨリシテ推斷シタル事
トヲ辨別セザルコト實ニ甚シ則此警戒ノ極メテ
肝要ナルヲ知ル可シ夫レ平常人ノ感覺シタリ
ト思フコトハ多クハ推斷ノ結果ナリ蓋各感官ハ
己ガ直ニ之ヲ覺ル能ハザルコトモ但累積ノ經驗
ニ由リテ無意ニ推斷スルノ力ヲ得ル者ナリ例

論理學 卷之十一
へバ眼ハ距離ヲ視ル能ハズ其能ク之ヲ度ルハ
常ニ慣レテ知ラズ識ラズ推斷ヲ行フノ結果ナ
リ夫ノ小兒ノ月ヲ捉ヘント欲スルハ其絶エテ
經驗無ク距離ヲ判断スルノ能力ヲ得ザルニ由
ル以テ距離ヲ辨別スルハ推斷力ニ由リ單純ノ
感覺ニ非ザルヲ知ル可シ又怯憶者ハ竿頭ニ曝
セル白キ浴衣ヲ見ルモ其恐怖心ニ迷惑セラレ
テ之ヲ鬼ナリト推斷スルガ如シ世間此類決シ
テ少シトセズ故ニ五官ノ感覺ニハ誤謬無シ但
此ニ由リテ推斷スル片ハ誤謬ニ陷ルノ恐有リ

觀察試験ハ唯歸納推理ノ第一段ニ於テ用井シ
ノミナラス第四段ニ在リテモ亦此ニ由ラザル
可カラズ然ルニ第四段ニ至リテハ既ニ我が假
設ノ説有ルガ為ニ自カラ偏執ヲ生ズルコト有リ
故ニ其説ヲ助成スルト背反スルトヲ問ハズ須
ラク最平心ニシテ一切ノ實事ニ無偏無私ノ觀
察ヲ為サザル可カラズ務メテ此偏執ヲ去ルニ
非ラザレバ到底有功有益ノ觀察ヲ為ス能ハザ
ルナリ或曰ク先必説ヲ設ケ次テ之ヲ厭惡ス可
シト其意蓋謂フ先必心中ニ吾ガ求ムル真理ノ

想像説ヲ設ケ而シテ恰モ之ヲ厭惡スルガ如ク
ニ嚴正ニ試験ス可シトナリ
第十五編 歸納推理ノ規則
歸納推理ハ許多ノ件々ヨリシテ之ヲ總括スル
所ノ真事ヲ定ムルナリ諸ノ理學科ニ於テ斯ク
推定セル真事ハ原因ト結果トノ關係ニシテ即
之レヲ造化ノ定綱ト稱ス
一事件ノ原因トハ其事件ノ顯ハレ出ツルガ為
メニ必要ナル事ヲ云フ人常ニ一箇ノ事件ハ一
箇ノ原因ヨリ生スル如ク認ムレドモ其實多ク

ハ然ラザル者ナリ譬ヘバ空中ニ水ノ滴有ル時
虹ヲ出現スト云フナレバ虹ノ原因ハ唯水ノ滴
有ルノ一事ニテハ無シ日光又觀者ト大陽ト水
滴トノ位置ノ關係等皆亦其原因ナリ
前事トハ一事件ノ顯ハレ出ツル前或ハ其顯ハ
ル、時ニ存スル情況等ヲ云フ後事トハ次デ顯
ハレ来ル事件ヲ云フ譬ヘバ雨降りタルノ後ニ
虹顯ハル、如キ其雨ノ降りタルハ前事、虹ハ後
事ナリ前事必シモ後事ノ原因ニハ非ズ原因ハ
謂ハユル必要前事ナリ

余ハ此ヨリ一顯象ノ原因ヲ發見スル歸納推理
ノ諸方法ヲ説明シテ其規則ヲ掲ゲントス
第一方法ヲアクリメント和同法ト稱ス左ノ規則ニ依ル
第一則ハ今正ニ研究スル顯象ノ現ハレ来リタ
ル諸例ヲ檢査シテ其前事ノ中唯一ノ某ノ情
況或ハ一ノ某ノ事件ノミ諸例ニ於テ共ニ同
シケレバ其情況或ハ事件ハ此顯象ノ原因ナ
リ
此方法ヲ用キント欲スル時ハ可成的多ク其顯
象ノ例ヲ集メテ其前事ヲ比較ス可シ而シテ前

事中ニハ其有ルモ無キモ更ニ顯象ヲ生スルニ
關係ナキ者アル可シ是等ハ皆必要前事ニ非ズ
又此顯象ノ現ハル、時ハ常ニ存スル所ノ前事
即諸例ニ於テ同シク見ル所ノ前事有ル可シ是
ヲ其一原因ト認ムルナリ今數多ノ例ヲ檢スル
ニ第一例ニ於テいろはヲ以テ表スル前事有リ
テイ、ロ、ハヲ以テ表スル後事有リ又第二例ニ於
テハ、い、に、ほ、へヲ以テ表スル前事ニイ、ニ、ホ、へヲ
以テ表スル後事有リ等トセバ左ノ如シ

前事

後事

論理田説 卷之十 同 盟 舎

いろは

イロハ

いにほへ

イニホへ

いと

イト

いちり

イチリ

いぬる

イヌル

等

今等

此諸例ノ後事ノ中ニ皆イ有リ即顯象イノ現出シタルモノナリ而シテ前事ノいハ一切ノ例ニ皆同シケレバ則いハイノ一原因ナリ第一方法ヲ用ヰルニ一ノ大困難有リ是レ同一

顯象ノ現出シタル諸例ニ於テ原因同一ナラザルニ由ル譬ヘバ熱ハ燒燃、摩擦、越歷、壓力等ノ何ニテモ起ル可シ故ニ熱ノ起リタル諸例ニ其原因ノ異ナルト有リスノ場合ニ在テハ第一ノ方法ハ無効ニ属ス又諸例ニテ一切ノ前事ヲ確知スルハ困難ハ此方法ノ一大欠點ナリ
第二方法ヲ違^{ダイツレシ}差^シ法ト稱ス左ノ規則ニ依ル
第二則 今正ニ研究スル顯象ノ現出シタル一例(甲)ト其現出セザル一例(乙)トヲ比較スルニ其情況ニ唯一事件ノ違差有リ而シテ此一事

論理 卷之十 十六 同 盟 舎

件ハ甲ニ於テハ存シ乙ニ於テハ存セス然レ
バ此異ナレル一事件ハ此顯象ノ原因或ハ原
因ノ一部ナリ
之レヲ上ノ如ク表ヲ以テ示セバ左ノ如シ

前事

後事

甲 いろは

イロハ

乙 ろは

ロハ

他語之レヲ説クバーノ前事存スレバ顯象ハ從
テ必現出シ此前事存セザレバ(他ノ情况ハ同一
ニシテ)決シテ現出セズ然ル時ハ此前事ハ顯象

ノ一ノ原因ナリ譬ヘバ摩擦ハ熱ノ一ノ原因ナ
リ何ナレバ二物ヲ摩擦スレバ必熱ヲ生ジ摩擦
セザレバ熱ヲ生ゼザレバナリ又動物ノ生存ス
ル時ハ必酸素有リ酸素無ケレバ生存セズ故ニ
酸素ハ動物生存ノ一原因ナリ
違差法ハ最有力多効ニシテ特ニ試験ヲ設ケテ
行フベキ方法ナリ譬ヘバ空氣ハ生存ノ一原因
ナルヤ否ヤヲ究メントスレバ須ラクーノ動物
ヲ排氣鍾ノ下ニ入ル可シ其鍾内ノ空氣ヲ排去
セザル間ハ生活シ之レヲ排去スレバ忽チ死ス

唯空氣有ルト無キトノ違ニ由リテ死ヲ致スナ
リ以テ空氣ハ動物生活ニ必要ナル前事即一原
因タルヲ知ル
斯ク試験ヲ行フニ當リテ最注意ヲ要スル事有
リ即唯一前事ハ有無ノミヲ變シテ他ノ情況ハ
毫モ變スルト勿カル可シ譬ヘバ空氣中ノ酸素
ハ生存ノ一原因タルヲ証セントセバ空氣中
ノ酸素ヲ抽キ取リテ動物ノ其中ニ生活スル能
ハザルヲ見ル可シ然レモ其酸素ヲ抽キ去ル
ノ際ニ更ニ他物ノ之レニ代ハリテ混入スル等

ノ事有リテハ此方法ヲ施ス能ハザルナリ今若
シ炭素ヲ一瓶ノ空氣中ニ燃セバ酸素ハ消失ス
ルモ更ニ炭酸瓦斯ト稱スル一種ノ瓦斯ヲ生ズ
而シテ動物此瓶中ニ生活セザレバトテ直ニ酸
素ヲ生活ノ一原因ト断定スルハ誤謬ナリ何ナ
レバ生活セザルハ此新生瓦斯ノ存在スルニ因
レルヤモ知ル可カラザレバナリ
故ニ違差法ヲ行フキハ亦唯一時ニ一情況ヲ變
ズルヲ肝要ナリ然ルニ或ハ此要訣ニ從フ能ハ
ザル場合有リ則一事情ヲ變ズレバ從テ他ノ事

情ヲモ必ス變ズルコト有リ譬ヘバ水ハ只其温度
ノミヲ變ゼント欲スルモ或ハ能ハズ之レヲ零
度以下ニスレバ固質ト為リテ温度ノ外ニ液質
ト固質トノ差ヲ生シ若シ強テ液質ヲ保タント
スレバ其壓力ヲ變ゼザル可カラズ故ニ到底温
度ノミヲ變ズルコトハ能ハザルナリ是ニ於テハ
和同違差合併ノ方法ヲ用井ルコトアリ此合併法
ノ原理ハ左則ノ如シ
第三則 一顯象ノ現出シタル(二個以上ノ)諸例
ハ二唯一ノ同一ナル某事情有リ又其現出セザ

例ル(二個以上ノ)諸例ニハ絶エテ此某事情無ク
限其他ノ情况モ各全ク同シカラズ斯ク其顯象
ノ現出シタル諸例ト其現出セザル諸例トハ
毎ニ此一箇ノ某事情ノ有ルト無キトヲ異ニ
セリ然ルキハ此某事情ハ此顯象ノ原因或ハ
又結果ナリ
之レヲ前則ノ如ク表スレバ左ノ如シ
前事

いろは
いには
イロハ
イニホ

論理 甲 諸 卷 下 同 盟 會

甲

いと
いちり

等

から

むろみ

乙

くやまけ
ふた

等

則前事い有レバ必後事い有リ(和同法ニ同シ)又
前事い無ケレバ後事い顯ハレズ然レモ他ノ情

況モ總テ相異ナレバ單ニ違差法ヲ行フ能ハ
ズ而シテ甲ノ諸例ト乙ノ諸例トハ皆いノ有無
ヲ異ニセリ斯ノ如キ時ハいハイノ原因ナリ
是ニ由リテ觀レバ合併法ハ只和同法ヲ擴張セ
ル者ニテ和同法ノ如ク數多原因ノ患有ル無ク
又違差ヲ行フ能ハザル所ニ用井ル可キ者ナリ
然レモ一切ノ前事ヲ確知スルノ困難ヲ免レザ
ルハ亦和同法ト同シ故ニ可成的ハ違差法ヲ
施スヲ最宜シトス

第十六編

定量歸納法

論理 卷 下 同 盟 會

前編ニ論シタル方法ハ其原因ヲ推究スル所ノ
 顯象ノ現出スルトセザルトニ因リテ為スモノ
 ナレバ是レヲ定質歸納法化學ニテ某物質ヲ分
 拆シテ其々ノ原素ヨ
 リ成レルモノナリト定ムルヲ稱ス可キ者タ
 定質分析法ト稱スルガ如シ
 リ本編ニハ此レニ對シテ定量歸納法化學ニテ
 某ノ物質
ハ其原素若干ト某原素若干ヨリ成
 ル者ト定ムルヲ定量分析法ト稱ス
 キ方法ノ規則ヲ述ヘントス凡ソ學術知識ノ進歩ハ定質ヨリ漸次ニ定量ニ
 達ス則先ツ最初ハ前事有レバ必某後事有リ某
 ノ事件ハ何等ノ理由ニテ起ルナリト断定ス而

後又一步ヲ進メテ此某前事ト某後事トノ度量
 ノ關係ハ何程ナルヤヲ計測シテ益々之ヲ精密
 ニスルナリ故ニ今一顯象ヲ研究セント欲スレ
 バ左ノ如ク順次ニ問ヲ設ケテ其答ヲ求ムルナ
 リ

(一) 某前事ハ常ニ某ノ一結果ヲ生スルヤ
 (二) 此結果ハ何如ナル方向有リヤ
 (三) 此結果ノ量ハ何如ナル比例ニテ原因ノ
 量ニ準スルヤ

(四) 此比例ハ常ニ變セザルカ

(五) 若シ變スルトキハ其變化ノ定則ハ何如
例ヘバ熱ノ諸物ノ大サヲ變スルヲ研究スル
ニハ先ヅ熱ハ果シテ能ク諸物ノ大サヲ變スル
ヤ否ヲ研究スルヲ第一ニシテ是レハ前編ニ説
明シタル方法ニ依リテ断定ス可キ問題ナリ次
ニ熱ノ諸物ノ大サニ及ボス所ノ結果何如ヲ見
ルニ攝氏四度以下ノ水並ニ僅少ノ物質ヲ除ク
ノ外皆其大サヲ増スルヲ試験ニ據リテ之レヲ知
リ得ルナリ又次ニ熱一度ヲ増ス毎ニ其物ハ何
程ニ増大スルヤモ亦試験ニ依リテ測定ス可シ

是ニ於テ更ニ一步ヲ進メテ精密ニ入り其熱度
ノ増加ト大サノ増加トノ比例ハ毎ニ相準シテ
決シテ變スルヲ無キガ若シ或ハ變スレバ其變
スルニ定則有ルヤ等ヲ查究セザル可カラズ
斯ク學科上ノ知識ハ定質ヨリ漸々進デ定量ニ
達スルナリ例ヘバ越歴及越歴磁氣學ニ關スル
顯象ノ若キニ三十年前マデハ唯其現出スルヲ
ヲ知ルノミニシテ未之レヲ度ルヲ能ハザリシ
ガ方今ハ此學科大ニ進歩シテ其顯象ハ大抵之
ヲ計算スルヲ得ルニ至リタリ

知識ノ進歩已ニ此ニ達シテ顯象ヲ度リ得ルノ地ニ至リテハ歸納推理ノ最有効ナル一方法ヲ應用スベシ之レヲ共變法ト稱ス則左ノ定則ニ依ル

第四則 某顯象有リ他ノ某顯象ノ變化スルニ從テ之レト共ニ變化スル片ハ其二者ハ互ニ原因結果ノ關係ヲ有ス

此方法ハ違差法ヲ擴張シタル者ニシテ唯某前事ノ有無ノ差ニ因ルノミナラズ又其多寡ニ由リテ原因結果ノ關係ヲ推究スルノ方法ナリ例

ヘバ摩擦ハ熱ノ原因ナルヲ發見スルハ前編ニ説明セル如ク違差法ヲ以テスベシト雖其何程ノ力ヲ用井テ摩擦スレバ何程ノ熱ヲ生ズルヤヲ度ルヲ得バ英人ジウル氏ノ現愈其關係ヲ確定スルコト明ナリ

此法ハ特ニ時期ヲ定メテ現出スル顯象ノ研究ニ應用ス可キ者ナリ例ヘバ夫ノ潮汐ノ若キ凡ソ每六時余ニ上下シ其期限畧十二時間半ニシテ正二月ノ同一子午線ヲ經過スル期限即地球ヲ一周スルト相同シ以テ月ト潮汐トハ因果ノ關係ノ半

論理田言
係有ルヲ知ル可シ又大陽面上ノ黒斑ハ凡ソ
五ヶ年半ノ間ハ其數次第ニ増加シ次ノ五ヶ年
半ノ間ハ漸次ニ減少シ凡ソ十一ヶ年ヲ以テ一
期トス然ルニ地球上ノ磁氣ノ變動ハ恰モ大陽
面上ノ黒斑ノ數ノ消長ニ準シテ激トナリ弱ト
ナルヲハ四十年来ノ觀察ニ因リテ明ナリ又近
頃木星、土星、金星、火星ノ運動ノ期限ト此二者
ノ變動期限ト正サシク相配合セルヲヲ發見シ
タリ故ニ此三者ハ互ニ因果ノ關係有ルヲ疑フ
可カラザルナリ

是ヨリ又餘剩法ト稱スル歸納推理ノ一法ヲ説
明セン則左ノ定則ニ依ル者ナリ

第五則 一ノ顯象ニ就キテ此レハ許多ノ前事

中某々ノ結果ナリト知了セル者ヲ扣除スレ

バ其剩ス所ハ則餘ノ前事ノ結果ナリ

此ニ前事いゝるは有リテイ、口、ハノ顯象現出セリ

而シテイハいノ結果口ハろノ結果ナルヲハ已

ニ知了スル所トスレバ剩レルハハはノ結果ナ

リ

例ヘバ某ノ試験中熱ノ發スルヲ有リテ是レ摩

諸理
論
擦化學作用及越歷作用ヨリ生ズルヲ知リ又其
發シタル熱ノ何分ハ摩擦何分ハ化學作用ニ由
リテ生ジタルヲ知リテ之ヲ扣除スレバ餘剩ノ
熱ハ越歷作用ニ由リテ生ズルヲ知ル可シ
諸ノ觀察試驗ヲ為スニ方リ必避ク能ハザル誤
謬有リ則此法ヲ用井テ之レヲ正ス例ヘバ某星
ノ位置ヲ度ルニ望遠鏡ノ性質ヨリ起ル誤謬有
リ空氣中光線屈曲ノ為メニ生ズル誤謬有リ又
觀測者ノ氣質ヨリ生ズル者有リ都テ此等ノ誤
謬ヲ扣除シタル者ハ則真ニ此星ノ位置ナリ○

又化學ニ於テ和合物中原素ノ分割ヲ知ルニ此
法ヲ用井ルノ多シ例ヘバ定量ノ酸化銅ヲ取り
テ之ヲ管ノ内ニ熱シ其上ニ水素ヲ通過セシム
レバ酸化銅中ノ酸素ト親和シテ水蒸氣ヲ生ズ
此水蒸氣ヲ硫酸ヲ入レタル瓶中ニ受ケテ水ト
為ラシム而シテ此硫酸ハ豫ジメ其重サヲ度リ
後ニ又之レヲ度リテ其重サノ差ハ則此試驗中
ニ生ジタル水ノ重サナリ又管中酸化銅ノ最初
ノ重サト最後ノ重サノ差ハ則水素ト和シテ水
ニ變ジタル酸素ノ重サナルヲ明ナリ斯ク水ノ

重サ若干ナリ内酸素ノ重サ若干ナリ故ニ之レヲ扣除シタル餘剩ノ重サハ水素ノ重サナリ斯クノ如クニシテ以テ水ノ百分中酸素幾許水素幾許ナルヲ知り得ルナリ

海王星ノ發見ハ此方法ヲ應用シタル最良キ例ナリ天王星ノ運動ヲ度リ幾分ハ太陽ノ引力ニ由リテ生ジ幾分ハ他ノ己ニ發見セル遊星ノ引力ニ因ルヲ測算シテ之レヲ扣除シタル後尚餘剩ノ運動有リタリ則此餘剩ノ結果ヲ生ズ可キ原因ヲ求メテ遂ニ海王星ノ存在スルヲ發

見シタルナリ

第十七編

經驗定綱類似法

第十五、第十六ノ二編ニ説明セシ方法ハ第十三編ニ述べタル真正歸納法ノ第二段ヲ行フ方法ニシテ即觀測及其他ノ方法ヨリ得來タル實事ヲ概括スル所ノ真事、定綱ヲ發見スルノ方法ナリ

然レ氏斯ク推定シタル真事中ニハ吾人曾テ其何ノ理由アリテ然ルヤヲ見ル能ハザル者有リ斯ノ如キ真事ヲ經驗真事又經驗定綱ト云フ此

論理田説 卷之二十一
類ノ知識甚多シニ晚霞ハ晴天ノ兆ナリ、角有ル獸
類ハ及嚙獸ナリ等ハ是レ皆經驗真事ニシテ吾
人ノ未其何ノ理由アリテ然ルヤヲ知ラザルモ
ノナリ前編ニ云ヘル太陽表面ノ黒斑、地上磁氣
變動及遊星運動ノ關係ノ如キハ其最著ノ例ナ
リニ經驗知識ハ有用ハ固ヨリ有用ナリト雖理由明
白ナル知識ノ貴重ナルハ更ニ之ガ比ニ非ザル
ナリ熱湯ヲ硝子器ニ注入スレバ忽チ破裂スル
コハ人常ニ經驗ニ由リテ知レル故ニ或者ハ以

為ヘラク薄キ硝子ハ固ヨリ薄弱破レ易キ物ナ
レバ熱湯ヲ注入スルトキモ亦厚キ硝子器ヨリ
ハ破裂シ易カラント然ルニ實事ヲ見ルニ薄キ
硝子器ハ熱湯ヲ注入スルモ破裂セズ厚キ硝子
ハ却テ破ル、モノナリ是レ蓋シ或者ハ何ノ理
由有リテ熱湯ハ硝子器ヲ破損スルヤヲ知ラザ
ルヨリ誤見ヲ生ジタルナリ此ニ至リテ物理學
ヲ學ビタル者ハ善ク其理ヲ知レリ抑是レ硝子
器ノ内外部皆同一ニ膨脹スル能ハザルニ由レ
リ薄キ硝子ハ内外部皆直ニ同一ノ熱度ヲ得テ

諸部等シク膨脹シ得ルガ故ニ此患ナキノ此
例ヲ以テモ唯經驗ノ由ル知識ト理由明白
ナル知識トハ其孰レカ尤貴重ナルヲ見ルニ足
レリ凡ソ學術ノ進步ヲ觀ルニ其初ハ唯僅ニ狭小ナ
ル概括眞事ヲ發得シ次ヲ逐ヒ漸ク進ミテ廣大
ナル概括眞事ニ到達ス故ニ最初ハ經驗知識多
ク單ニ歸納推理ノ法ヲ用ヰルノミ其漸ク進ミ
テ稍談博ナル概括ヲ得ルニ及ビテハ歸納演繹
并ビ行ハレテ以テ最有益最有効ノ知識ヲ發見

スルニ至ル
例ヘバケプレル第十三編ハ遊星ノ動行ヲ觀測
シ歸納推理法ニ由リテ其定則ヲ發見シタリ然
レ氏是レハ唯經驗知識ナリニウトンハ更ニ之
レヲ推究シ歸納及演繹推理ノ二法ヲ用ヰテ遂
ニ萬物引牽ノ定綱ヲ發見シタリ爾來此定綱ニ
從ヒテ演繹推理シテ知り得タル眞事ノ數ノ多
ク且貴重ナルハ實ニ言語ノ能ク盡ス所ニ非ズ
蓋シ學術進步ノ順序ハ大概皆斯ノ如キモノナ
リ

此ニ歸納推理ノ特別ナル一方法大ニ前ニ述ベ
タル所ト異ナル者有リ之ヲ類似推理法ト稱ス
則某ノ一事ヨリ某ノ之ニ類似セル事ニ論及ス
ルヲ云フ例ヘバ火星ヲ觀察スルニ我が地球ニ
酷肖セル件々頗多シ因テ火星ニモ或ハ生活物
ノ存在スルコト有ル可シト推究シ又或ハ生活物
ノ組織ト國家ノ組織トハ大ニ相類似セルガ故
ニ其發育盛衰モ亦同様ナル可シト推定シ又甲
國ノ現状ヲ觀ルニ宛モ乙國某時ノ状態ニ彷彿
タレバ乙國ノ某時ニ起リシ某々ノ事件ハ甲國

ノ現時ニモ起キ来ルナラント察スルガ如シ
類似推理法ノ原理ヲ約言スレバ左ノ如シ
某事(甲)ト某事(乙)ト數多ノ條項相類似セリ然ル
片ハ其餘ノ事項モ或ハ相類似スルナル可シ
尋常ノ歸納法ニ於テハ數多ハ事物ニ一ニ同
一事項有レバ因テ之ヲ概括シテ他ハ事物ニ論
及スルナリ類似推理法ニ於テハ一ニハ事物ニ
數多ハ同一事項有レバ因テ他ハ事項モ同一ナ
ル可シト推断スルナリ故ニ尋常ノ歸納法ニテ
ハ類似ノ點少クシテ其區域廣シ類似法ニテハ

論理田言 卷之四 同盟舎
類似ノ點多ク其區域狹シ
類似推理法ハ甚危険ナル方法ナリ真貨ト贋貨
トハ類似ノ點頗多シ其全ク相異ナル所ハ最肝
要ノ一點ナリ人或ハ毒菌ヲ食テ死スル者有リ
是全ク可食菌ト類似ノ點多キヲ以テ其可食ノ
點モ同一ナラント誤認シタルニ由レリ是瑣細
ノ例ナレドモ世間ニハ類似法ヲ用井其最緊要
ノ點ノ絶エテ類似セザル者ニ推及シテ誤謬ニ
陥リ甚シキハ之ヲ悟ラザル者極メテ多シ此方
法ヲ利用セント欲スル者ハ尤謹マザル可カラ

余ハ歸納推理法ヲ説明スルニ當リテ多ク理學
上ノ單易ナル事項ヲ引用シタリ蓋シ理學ハ歸
納推理ヲ應用シタル最良ノ例ナレバナリ吾人
平生事ニ觸レ物ニ接スルニモ正當ノ推理ニハ
固ヨリ必上ニ述ベタル規則ヲ遵奉セザル可カ
ラズシテ知ラズ識ラズ此法ヲ現行セリ例ヘバ
夏夕他所ヨリ吾家ニ歸リ庭ニ立出テ、地面ノ
濕ヒタルヲ見レバ是レ驟雨ノ降りタルナリト
断定スベシ此際頗ル錯雜ナル歸納推理ヲ行フ

テ此断定ニ達スルコト有リ今其順序ヲ略述スレ
バ左ノ如シ先ヅ地面ノ濕ヒタルヲ見テ第一段
聚驟雨ノ降りタルカ或ハ家僕ノ水ヲ灑キタル
ナラント推察ス第二段是レ蓋シ前日水ヲ灑キ
又雨ノ降りタル時ニ似同セルヲ以テナリ類似
法或ハ今若シ水ヲ灑キタルモノトセバ高キ梢
和同法ハ濡レザル可ク亦地上モ平均ニ濕ハザル可シ
第三段演繹然ルニ高梢ハ點々翠ヲ滴ラシ且地上
モ一面ニ濕ヒタリ故ニ水ヲ灑キタルニハ非ズ
然ラバ驟雨ノ降りタルナランニハ樹下石陰ハ

濕レズシテ其他ハ一般ニ濕フナラント之ヲ視
ルニ果シテ然リ且天空モ平生驟雨ノ後ニ見ル
所ノ景色ナリ第四段故ニ是レ驟雨降りタリト
断定シ得タリ又法庭ニ於テ罪ヲ審判スルガ如
キハ多ク此方法ヲ應用スル例ナリ
學者心ヲ用テ善ク平常已レト他人が行フ所ノ
推断ヲ驗査シテ其正シキ者ニ遭ハシ推理ノ規
則ニ適ヘルコトヲ發見ス可シ然レ氏規則ヲ知ラ
ズシテ推断スレバ謬妄ニ陥リ易ク且ツ陷ルモ
之レヲ悟ラザルナラン故ニ推理ノ規則ヲ確知

シテ常ニ之ヲ遵奉スルヲ極メテ肝要ノ事トス
ルナリ
第十八編 誤謬推理法
演繹歸納兩推理ノ正法ハ編々相續テ己ニ畧説
シタレバ推理學ハ之ヲ以テ粗完了セルガ如シ
ト雖モ更ニ人ノ平生輒モスレバ陷リ易キ誤謬
推理法ヲ明ラムルコトハ亦正當推理ヲ行フニ極テ
有益ナル一助タリ則人ニ教フルニ某當ニ斯ノ
如クスベシト言ヒ更ニ又期ノ如クス可カラズ
ト示シテ表裏相照ラサシメバ其効功タル豈ニ

甚大ナラズヤ故ニ今本編ニ於テ主重ナル誤謬
推理法ヲ揭示セントス
本編ニ論スル誤謬推理法ハ偶失ノ者ヲ云フニ
非ラズ偶失トハ其方法ノ不正當ナルニモ非ズ
亦正當ノ方法ヲ識ラザルニモ非ズシテ全ク一
時ノ不注意ヨリ起リタルヲ云フ譬ヘバ算術ヲ
為シテ八ト五ノ和ヲ十二ナリトシ七九ヲ六十
四ト為スガ如キ類ノ偶然ノ失錯ニテ唯其術ニ
熟練セザルヨリ起レル者ナリ本編ノ主旨ハ是
等ヲ問ハズ專ラ方法ノ正當ナラザル者ヲ論ズ

ルニ在リ
品行上ヨリ生スル誤謬法モ亦之ヲ論ゼズ品行
上ヨリ生ズル誤謬トハ真理ヲ輕忽スルカ或ハ
邪執有ルニ由ル者ヲ云フ凡ソ人固執スル所有
レバ其邪執ノ勢援ヲ為ス可キ証據ハ熱心ニ之
ヲ求メ若シ其不利ナル者ハ目ヲ閉テ見ズ因テ
以テ誤謬ニ陥ルヲ致ス斯ノ際ニ方リ邪執ハ間
接ノ原因ニシテ直接ノ原因ハ則不充分ナル証
據ヲ以テ充分ナリトスルニ在リ故ニ間接ニハ
品行上ヨリ来ル所ノ誤謬モ亦直接ナル智力上

ノ原因ニ由ラザルヲ得ズ則智力上ノ鍛鍊已ニ
充分ナレバ何程邪執有ルモ又ハ真理ヲ輕忽ス
ルモ不正ノ推理ヲ以テ自ラ欺ク「能ハ不完
全ナル証據ヲ以テ満足セント欲スルモ能ハザ
ルナリ
故ニ此ニ論スベキ者ハ智力上ヨリ来ル所ノ誤
謬法ナリ」余今ミル氏ノ説ニ從テミル氏ノ分類
傳來シテ「ジェボンス氏等ノ誤謬法ヲ分類スル」
説ク所トハ大ニ異ナレリ
左ノ如シ
甲單問ノ誤謬是レ更ニ推斷ヲ行ハザル時ノ誤

謬ナリ則單ニ一述意ヲ閱シテ直ニ以テ真ナリトスル者ヲ言フ是レ或ハ更ニ証據ヲ要セザル者ト見做シ或ハ心ニ自カラ信ズル所有リ不完全ナル証據ヲ以テ満足セル者ニ在リ但シ此件ハ本書ニ之ヲ詳論スルヲ能ハズ凡ソ証據無ク直ニ認メテ真ト為スヲ許可スルハ是等ノ真事リオリ真事ト云フ故ニ此類ノ果シテ何々ノ件誤謬ヲ先天誤謬ト稱ス可シ

項ヤ是レ心論ノ最大問題ト為リ古今諸大家ノ說皆大ニ異ナリテ之ヲ解スルヲ極テ難シ故ニ余ハミル氏ガ揭示セル者ノ内ニ就テ極テ平凡

ナル二三ノ例ヲ舉ゲシノミ

尋常俗人ノ迷惑ノ如キハ多ク此例ナリ夫ノシノ字ヲ忌ムハ口ニシノ字ヲ言ヘバ現ニ死ヲ來タス可シト恐ル、ニ因ル羅馬人ハ常ニ死ノ語ヲ忌避シ某ハ死セリト云フベキ所ニ某ハ活タリキト云ヘリ日本ニテ人ノ死ヲ無クナレリ又ハか目出度ナレリト言フモ同事ナリ是ヲ概言スレバ思想ト為リテ心上ニ現ハレタル事ハ真ニ實物界ニ出現ス可シトノ單閱誤謬ニ因レリ家相惠方等ノ如キモ皆單閱誤謬ノ例ナリ又

貴重ナル物珍奇ナル物ニハ貴重或ハ珍奇ナル
 性質有リトスルモ亦此類ノ通常ノ誤謬ナリ例
 ヘバ人參ヲ服スレバ如何ナル病ヲモ治スルト
 シ或ハ真珠ヲ以テ眼病ノ妙藥トシ甚シキニ至
 リテハ酉ノ年月日時齊ヒタル者ノ生血ハ何ノ
 効有リト言フハ此誤謬ノ結果ナリ凡ソ此類ノ
 單閱誤謬枚舉ニ違アラザルナリ此等ノ中或ハ
 觀察或ハ概括ノ誤謬後ヲト見倣シ得可キ者有
 リ
 人ノ心ニ思フ能ハザル事ハ虚ナリ
 誤謬ノ例

中ニ掲ケタルモペンサ等ノ説ニテハ是全
 ク誤謬ニ非ズミル氏ノ之ヲ非トセルコソ却テ
 誤謬ノ極メテ難キコト以テ知ルベシ
 一ノ原因有ルノ之ノ誤謬
 天然ノ差別ハ言語
 ノ差別ニ對ス太古希臘學顯象ノ原因ハ其顯象
 ニ似タリ等皆單閱誤謬ノ例ナリト云フ
 乙推斷ノ誤謬是レ証據ヲ推シテ断定スル際ニ
 行ハル、誤謬ナリ此ニ二大別アリ第一ハ推斷
 ノ前提即証據ヲ分明ニ了解シ而シテ其断定ス
 ル所ハ正當ナラザル者第二ハ前提ヲ明了ニ解
 得セザル者之ヲ迷乱ノ誤謬ト名ツク其小分類

論理各説 卷之下 三五 同 盟 舎

ハ尚後ニ説明スベシ
第一類ヲ推断ノ方法ニ依リテ歸納演繹兩推理
上ノ二種ニ小分シ更ニ各種ヲ小分シテ又二ト
ス第一証據即前提ノ虚ナル者第二証據即前提
ハ眞實ナルモ直ニ此ニ因テ断言ヲ推定スル能
ハザル者
歸納推理ノ誤謬中第一小分類即証據ノ虚ナル
者ヲ觀察ノ誤謬ト称ス歸納推理ノ証據即前提
ハ實事ナリ第十三編歸納推此實事ハ觀察ニ因
リテ得ルモノタルガ故ニ此實事ノ虚ナルハ觀

察ノ正シカラザルニ由レリ歸納推理ノ材料ノ
如キ時ニ因リテハ直ニ觀察シタル實事ナラズ
シテ曩ニ已ニ推断シ得タル所ノ事項有リ而シ
テ前日ノ推断正當ナラザリシヨリ其断定セシ
事項ノ虚ナルヲモ亦有ル可シ則此ノ如キモノ
ヲ証據トシタル推断モ亦此分類ノ誤謬ニ属ス
故ニ之ヲ觀察ノ誤謬ト称スルハ少シク允當ナ
ラザル如シト雖到底歸納推理ノ本原ハ觀察ニ
在ルヲ以テ今姑ク此名ヲ存ス第二小分類ヲ概
括ノ誤謬ト称ス証據タル實事ハ眞ニ實事ニシ

テ唯之ヲ概括スル法ノ正當ナラザル者ナリ
演繹推理ノ誤謬中第一小分類ハ已ニ揭示セル
誤謬中ノ一ナリ演繹推理ノ前提ハ概括真事(定
綱)或ハ個々ノ實事ナリ故ニ前提ノ虚ナルハ單
閱ノ誤謬ナルカ否ザレバ觀察或ハ概括ノ誤謬
ナリ故ニ此小分類ハ特ニ存スルヲ要セズ第二
分類ハ推測式ノ規則ヲ遵守セザルヨリ生ズル
者之ヲ推測ノ誤謬ト称ス
斯ク五種ノ誤謬ヲ得タリ左ノ表ニ因リテ詳ナ
ル可シ

單閱ノ誤謬、(一)先天誤謬

(二)觀察ノ誤謬

(三)概括ノ誤謬

(四)推測ノ誤謬

(五)迷乱ノ誤謬

推斷ノ誤謬

証據ヲ明了ニ
解得セザル時

証據ヲ明了ニ
解得シタル時

歸納推理上、

演繹推理上、

斯ノ如ク分類スレドモ誤謬ハ其何レニ属スル
ヤ極メテ判然タル者ニ非ズ見ル所ノ何如ニ由
リテ彼是ノ類中ニ存属セラル者有リ
(二)先天誤謬ハ已ニ論ジタレバ他ノ四類ヲ頗ル
詳論シ可成的單易ノ例ヲ舉ゲテ之ヲ説明ス可

論理 附言 卷之十一 同 盟 舍
シ 論 之 下 附 單 是 大 同 又 舉 之 下 附 單 是 大 同 又 舉 之 下
三 觀 察 ノ 誤 謬 第十四編ヲヲ分チテ觀察ヲ為サ
参考セヨ
不 即 漏 脱 ヲ 生 ズ ル 者 及 觀 察 ノ 差 即 過 失 ヲ リ
生 ズ ル 者 ハ 二 種 ト ス
第 一、 觀 察 ノ 漏 脱 ニ 諸 例 ノ 漏 脱 ト 情 況 ノ 漏 脱 ト
ノ 二 小 分 ア リ 諸 例 ノ 漏 脱 ト ハ 吾 ガ 研 究 ス ル 事
件 ノ 例 ヲ 觀 察 シ 盡 サ バ ル ナ リ 情 況 ノ 漏 脱 ト ハ
一 例 中 重 要 ノ 情 況 ヲ 觀 察 セ ザ ル ナ リ 例 ヘ バ 此
ニ 一 占 者 有 リ 我 只 彼 レ ガ 預 言 ノ 當 リ タ ル 例 ノ ミ
ヲ 見 テ 其 當 ラ ザ リ シ 例 有 ル ヲ 知 ラ ザ ル ハ 是 諸

例ノ漏脱ナリ若シ又其當リタル例ハ彼レガ騙
欺ヲ行フテ當テタルニ我レ之ヲ知ラザレバ是
情況ノ漏脱ナリ○諸例漏脱ノ主眼ナル起因ニ
二有リ世人毎ニ一方ノ例ハ深ク之ヲ心ニ銘シ
他ノ一例ハ輕忽ニ看過スルヲ有リ夫ノ呪咀^{マシナヒ}ノ
世ニ信セラルハ多クハ是ニ由ル則是レ呪咀
ノ効驗有リシト見ユル一例ハ人ノ記臆ニ存シ
其効驗無キ一例ハ心ニ留メズ因テ以テ呪咀ヲ
効驗有リトスルガ如シ其他此ノ類世間ニ頗多
シ俗云フ出産ハ汐ノ變リメニ當ルト夫レ汐ハ

一晝夜ニ四回變動スル者ナレバ其時刻ニ幾許ノ出産有ルハ固ヨリ怪ムニ足ラザルニ世人ハ只管之ヲ心ニ存記シ其然ラザル例ハ敢テ心頭ヒタスラニ置カズ道理ト証據トニ関ラズシテ今ニ尚之ヲ信スル者有リ
今一個ノ重要ナル起因ヲ偏執ト云フ所謂先入主ト為リテ之ニ逆フ所ノ例ヲ見ザルハ凡人ノ常ナリ今其尤著ルキ一例ヲ舉ゲンニ凡ソ重キ物ハ地ニ墜ツルヲ輕キ物ヨリモ速ナリト太古ヨリ言傳ヘタリ此説先入主ト為リ曾テ此説ノ

全ク真ニ反ケルヲ見ザリシハ諸例漏脱ノ誤謬ナリ簡單平易ノ事件ニ於テスラ猶此ノ如シ況ヤ道德品行、政治、社會、宗教等ニ関リ情感ノ激動スル夾雜ナル場合ニ於テヤ○情況ヲ漏脱スル誤謬ハ前ノ占者ノ例ニテ詳ナル可キモ更ニ一例ヲ示ス今何佛ニ日參シテ何病癒ヘタリト云フ人アランニ是レ其實ハ佛ノ功力ニ頼リシニ非ズシテ日參スルガ為ニ運動ヲ善クシ清鮮ノ空氣ヲ吸ヒタルニ由ルヤ或ハ其他ノ原因アリテ然ルヤモ亦料リ難シ是則重要ナル情況ヲ

論理 田説 卷之十一 同盟舎
觀過スルノ誤謬ナリ
第二觀察ノ誤謬ノ第二分類ハ觀察ノ過失ナリ
五官ノ感覺ニハ固ヨリ過失アルヲ無ケレバ則
此誤謬ハ心中ニ推斷セシ事ヲ五官ノ感覺ナリ
ト誤認スルニ在リ蓋シ其知識ノ多カラザルト
心ノ鍛鍊足ラサルトノ度ニ準シテ斯ノ如キ誤
認ノ甚シキモノナリ人或ハ日ノ登リ又没スル
ヲ見タリト云ヒ又衆星ノ北辰ヲ繞リテ動クヲ
見ルト云フ然ルニ其實ハ之ヲ見タルニ非ズ只
日或ハ星ノ自己ニ對シテ其位置ヲ變スルヲ見

タルノミ他ヲ動キタリトスルハ其推斷ナリ之
ニ及シテ識者ハ他ノ動クニ非ズ己ノ動クナリ
ト推斷ス直接ニ五官ノ感覺スル所ハ極テ少ク
感覺ヨリシテ推斷スル所ノ事項ハ甚多ク且吾
人ニ在テ最重要ナルガ故ニ此誤謬モ亦常ニ甚
多シ吾人須ラク勉メテ心理學ヲ學ビ善ク心ヲ
鍊リ以テ之ヲ防ガザル可カラザルナリ
三概括ノ誤謬ハ其範圍最廣ク之ヲ分類スル
亦極テ難シ前ノ數編ニ説キタル歸納推理ノ原
理規則ニ適ハザル者ハ皆此ノ誤謬ナリ今唯

ル氏ノ説ク所ニ從テ二三ノ主重ナル誤謬ヲ掲
ク凡テ地球上或ハ大陽系内ノ經驗ニ因リテ推
斷シタル事ヲ將來リテ其外ナル宇宙ノ遠キ
部分ニ及ボスハ誤謬ナリ又唯經驗ニ因リテ
推定シ其理由ハ未見ザル所ノ定綱或ハ真事ヲ
經驗外ニ及ボス可カラズ希臘ノ碩學アリスト
トトルガ社會ハ奴隸ノ制無ケレバ繁榮ナル能
ハスト斷言シタル如キ是太古ノ社會ニハ自カ
ラ然ル可シト雖近世ノ社會ニ至テハ決シテ然
ラズ蓋シアリストトトルハ太古ノ社會ニハ土

隸ノ制ノ必要ナル理由ヲ究メザリシヲ以テ唯
經驗上ヨリシテ一切ノ社會ニ論及シタリ斯ノ
如ク現ニ今日ノ社會ニ必要ナル事モ善ク其理
由原因ヲ究メズシテ將來ニモ必要ナル可シト
斷定スルハ概括ノ誤謬ナリ俗毎ニ學者ハ迂遠
ナリト云フモ其說往時ニ在テハ或ハ真ナリト
スルモ未深ク其理由ヲ究メズシテ學科學風等
ノ殊異ナル將來ニ及ボス概括ノ誤謬ヲ生ズル
ハ是レナリ又二個ノ顯象相次テ現出スル時
ハ直ニ認メテ之ヲ原因ト結果ノ關係有リトス

ル者モ亦最常ニ行ハル、概括ノ誤謬ナリ例ヘ
バ何年ニハ彗星現ハレテ饑饉ナリシ故ニ彗星
ハ饑饉ノ前兆ナリト推断シ又前夜ノ夢ハ悪シ
カリシ故ニ今日ハ斯ク失敗シタリ等俗間ニ行
ハル、此類ノ誤謬頗多シ或人ノ説ニ某國ハ貿
易ニ保護税ヲ設ケテ繁昌セリ故ニ保護税ハ國
ノ繁昌ヲ助クト云ヘル如キハ是レ誤謬ナリ若
シ他ニ保護税ノ國ノ繁昌ヲ助クルヲ認ム可キ
理由有リテ特ニ某國ヲ掲テ之ガ論証トセシナ
レバ幾許ノ効力有ル可シト雖モ只前述ノ如キ

ハ毫モ証憑タルノ効力無シ某國ノ繁榮ハ却テ
保護税ノ為ニ阻滯セラレタルモ他ノ原因有リ
テ之ニ勝チタルヤモ亦未知ル可カラザルナリ
偽類似ハ又誤謬ノ極メテ常ナル者ナリ第十七
編類似推想法ノ一例ニ揭示セル生活物ノ組織
ト國ノ組織トノ類似ノ如キハ最小心翼翼トシ
テ之ヲ應用セザレバ誤謬ヲ生シ易シ則生活物
ニ幼壯老死ノ時期有リ故ニ國ニモ亦幼壯老死
ノ時期有リトスルガ如キハ平常最行ハル、所
ノ誤謬ナリ或ハ國ト家トヲ比較シテ國ヲ治ム

論理 田記 卷之七 同 盟 會
ルハ家ヲ治ムルト同理ナリトスルモ亦偽類似
ノ誤謬ナリ譬喩ヲ以テ論ヲ立ツル者ハ特ニ此
ノ誤謬ニ陥リ易シ夫レ譬喩ハ推論ニ非ズ唯正
當ノ譬喩ハ善ク論旨ヲ明白ニシ或ハ証據ヲ示
ス₁有リ例ヘバ教育ヲ主張スルニ有形ノ譬喩
ヲ用テ地ヲ耕サレバ惡草ヲ生ス₂ト云フガ如
キハ教育ノ必要ナル理由ヲ明ニスルヲ以テ大
効有リ然レ₃氏ベイコン氏ノ如ク世態ノ進行ヲ
河流ニ比シテ曰ク河上ヨリ流れ來ル物ハ塵芥
泡沫ノ如キ輕浮物ニシテ重キ物ハ河底ニ沈ミ

テ消失スル如ク吾人ノ太古ヨリ遺傳シタル物ハ
價値少キ物ノミナリト斯ノ如キハ譬喩ノ當ヲ
失ヒ輕浮ノ語ノ為ニ誤マラレタルナリ吾人尤
慎マザルベカラズ又彙類法ノ宜シカラザルガ
為ニ生ズル誤謬モ甚多シ則同一ノ性質無キ者
ヲ一類中ニ集メ同一ノ名稱ヲ付シテ以テ同一
ノ性質ヲ有セル者ト做シテ推断ス₄亦此類中
四推測ノ誤謬トハ推測式ノ規則ニ戾ル者ヲ言
ヘルニテ第五編ニ述べタル述意反對ノ理ニ反
スルノ誤謬モ亦此類中ニ屬ス則大反對ト實反

對トヲ混合シ普称肯定述意阿ノ否ナルヲ以テ
其大反對普称否定江ヲ當ナリト推断シ或ハ江
否ナルヲ以テ阿ヲ當ナリト推断スルノ誤謬ナ
リ轉換及直接推断ノ定則ニ背ク者モ亦此類中
ニ属ス其定則ハ既ニ第七編ニ説キタルヲ以テ
今其犯則ヲ詳説スルヲ要セザルベシ推測式ハ
編ヲ第一則ニ戻ル者ヲ四名辞ノ誤謬ト稱シ第三
見ヨ 則ニ戻ル者ヲ中名辞不周逮ノ誤謬ト稱シ第四
則ニ戻ル者ヲ大名辞或ハ小名辞犯則ト稱シ第
五則ニ戻ル者ヲ否定前提ノ誤謬ト稱ス第六則

ヲ犯スハ別ニ名称無シ第七則第八則ハ前六則ヨ
リ推究シ得ル者ナレバ其犯則モ亦前ノ犯則中
ノ一トス可シ余ハ此等犯則ノ諸例ヲ掲示セシ者
ト欲セシモ第八編ヲ熟讀セシ且ツ
ハ既ニ此等ノ理ヲ解得シ去ルベシト信シ且ツ
本書ニ説述スル所ノ事項ニ係ル試問例題等ハ
他日之ヲ編輯シテ本書ノ附録ト為設若推測式
サントス故ニ茲ニ省キテ載セズノ定則ニ戻ルハ第十二編ニ述ベタル如ク到底
前ノ誤謬ト見做スヲ得ベシ然レ此誤謬ハ頗
常ニ行ハル、ヲ以テ特別ノ名稱有リ後項ノ當
ナルニヨリテ前項ヲ當ナリト推断スルヲ前項
肯定ノ誤謬ト云フ前項ノ否ナルニヨリテ後項

ノ否ヲ推斷スルヲ後項否定ノ誤謬ト稱ス又前
提ヲ變ズルハ誤謬ト稱スル者有リ此誤謬ハ前
提述意中ノ名辭ノ意義ニ限界有ル者ヲ限界無
ク用ヰ或ハ之ニ及シテ前提述意ニハ廣ク言ヒ
タルヲ狹ク用ヰル者ヲ云フ例ヘバ人ハ皆其身
体ノ自由ヲ保ツノ權理有リト云フキハ狂人犯
罪者等ヲ除クハ勿論ナルベキニ今此等ノ限界
ニ注意セズミテ之ヲ前提トスルハ誤謬ナリ又
及物ヲ以テ人ノ身体ヲ突ク者ハ眾人ナリ外科
醫者ハ(其治療ノ際)人ノ身体中ニ刀ヲ突キ入ル

ガ故ニ罪人ナリト云フ若キ是レ前提ヲ其包含
セザル境界ニ及ボシタルト明ナリ又某市場ニ
賣ル所ノ物ハ人ノ食スル物ナリ腥肉ハ某市場
ニ賣ル所ナリ故ニ腥肉ハ人ノ食スル物ナリト
スルガ若キハ是レ本廣ク肉ニ就テ言ヒタル前
提ヲ狹限シテ單ニ腥肉ニ就テ言ヒタル如ク用
ヰルナリ故ニ此誤謬ハ前提ノ真意ヲ誤リ其名
辭ノ意義ノ内包ヲ錯ル者ナリ以上二件ノ如キ
ハ顯然人ヲ欺ク能ハズト雖世間ニハ有意ト無
意トヲ問ハズ此誤謬推理法ヲ行フ者極テ多ク

且之ヲ看破スルノ頗難シ特ニ社會學、政治學、經濟學等ニ於テ最甚シトス

四迷乱ノ誤謬トハ証據ヲ明白ニ解了セザルヨリ起ル者ナリ第一言語ノ曖昧、第二論点潛定、第三要点錯誤ノ三種アリ

第一言語ノ曖昧ニ數種有リ一ノ推論中ニ一名辭ヲ掲ケテ之ヲ不同意義ニ用井ルモノアリ例ヘバ人ヲ害スル者ハ罰ス可シ病ヲ傳染スレバ人ヲ害ス故ニ病ヲ傳染スル者ハ罰ス可シト云フハ是レ「害」ノ語大小前提ニ於テ意義ヲ異ニス

ルナリ又他人ノ商業ヲ妨碍スルハ法律ノ禁スル所ナリ今他店ヨリモ賤ク物ヲ賣レバ他店ノ商業ヲ妨グ故ニ他店ヨリ賤ク賣ルハ法律ノ禁スル所ナリトスル若キ是レ全ク商業妨碍ノ語ノ曖昧ナルヨリ生ズル誤謬ナリ文ノ結構ニ因リテ意義ノ曖昧ナル者有リ例ヘバ「三ト二ノ倍」ト云フ所ハ三ニ二ノ倍即四ヲ加ヘタル者カ或ハ三ト二ノ和即五ノ倍ナルカ判然セズ思フニ本邦ノ語ニハ此種ノ誤謬ハ甚多カラズ「集合及分散」ノ誤謬ト称スルハ此類中ノ甚重要ナル者

トス則名辭ヲ一ノ推論中ニ或ハ集合ノ意ニ使
ヒ或ハ分散ノ意ニ用ヰルヲ云フ例ヘバ三角形
ノ総角ハ二直角ニ同シ是レ此角ハ三角形ノ一
角ナリ故ニ此角ハ二直角ニ同シト云フ若キ大
前提ニ於テハ總テハ角ヲ合ハスル義ニシテ即
集合ノ意義ナリ然ルニ小前提ニ於テハ「三角形
ノ何ノ角モ皆各ト云ヘル意ニ解シタルナリ又
當府ノ住民ハ男女老少ヨリ成立テリ今此堂ニ
會セル者ハ當府ノ住民ナリ故ニ此堂ニ會セル
者ハ男女老少ナリトスルガ如シ夫ハ奢侈禁耽

クル人ノ此等ノ事ハ家産ヲ傷クルニ足ラズ此
等ノ事ハ為スモ可ナリトシテ遂ニ身代ヲ破滅
スルハ此ノ誤謬ヨリ來タルナリ又或ハ衛生ノ
定則ヲ犯ス者ノ毎ニ此ハ瑣事ナリ此ハ細事ナ
リトスルモ同ジク然リ即一一ニ分散シテ云フ
片ハ瑣事ナルモ之ヲ集合スレバ決シテ瑣事ニ
非ザルナリ數問ノ誤謬モ亦此類中ニ屬ス即數
問ヲ一問目ノ如クニシテ對論者ヲ衒迷スルナ
リ例ヘバ「汝ハ汝ノ母ヲ毆打スルヲ止メタル
カトノ問ニ若シ止メタリト答フレバ以前ハ毆

打シタルガ如シ若シ止メズト答フレバ今猶毆
打スルニ似タリ蓋シ此問ハ汝ハ毆打シタル
有リヤ今猶毆打スルヤ二問ヲ一ニシタルナ
リ討論ノ際斯ノ如キ問ヲ設ケテ反對論者ヲ陷
レントスル者無シトセズ西洋代言人ハ反對ノ
証人ヲ困メンガ為ニ毎ニ此術ヲ行フコト有リト
云此他或ハ文ヲ讀ムノ際聲音ノ高低等ニ因リ
テ文意ヲ誤ルガ如キ誤謬有リ
第二、論点潛定トハ前提即証據ノ或ハ断言ト同
一ナルカ或ハ其實ハ断言ヨリ推断シテ得タル

者ナルヲ云フ例ハハ
甲ハ乙ナリ
乙ハ甲ナリ
丙ハ乙ナリ
乙ハ甲ナリ
丙ハ甲ナリ
ト推断センニ其丙ハ甲ナリト云ヘル前提ハ左
推测式ニ由リテ得來リタル者ナル可シ
然ルレハ前ノ断言ヲ用キテ前ノ前提丙ハ甲ナ

リヲ証スレバ其推断式ノ無効ナルヲ明ナリ但
シ斯ノ如ク簡單ニ示ス片ハ其誤謬ナルヲ明ラ
メ易シト雖或ハ前後其言語ヲ異ニシ或ハ二推
断ノ間數歩ヲ距ルガ故ニ相蔽フヲ多シ斯ク數
歩ヲ距テタル片ハ特ニ循環互証ノ誤謬ト稱ス
例ヘバ甲ハ乙ナリ是レ丙ノ丁ナルニ據リテ之
ヲ知ル丙ノ丁ナルハ戊ノ己ナルニ據リ戊ノ己
ナルハ庚ノ辛ナルニ據ル然ラバ庚ノ辛ナルハ
何ニ據リテ之ヲ知ルヤト云フニ遂ニ最初証明
セントスル述意甲ノ乙ナルニ據ルガ如シ然ル

ニ世人ハ平日思考ノ際ニ一々斯ク論究セズ只
甲ノ乙ナルハ丙ノ丁ナルニ據ルトシ其丙ノ丁
ナルヲハ我が曾テ自信スル所ナレバ更ニ進ミ
其理由ヲ求ムルヲ為サズシテ此ニ止レリ然レ
氏前述ノ如ク詰問セラル、片ハ遂ニ循環シテ
其發点ニ回ルヲ往々是ナリ此誤謬ノ今一例ヲ
舉グレバ何故ニ「モルヒ子」ハ人ヲ眠ラシムルヤ
ノ理由ハ其麻酔劑ナルヲ以テナリトスルガ如
シ

第三、要点錯誤謬ハ極テ多ク枚舉スルニ遑アラ

論理學 卷之十一
ズ普稱述意ノ断定ヲ要スル場合ニ局稱ノ断言
ヲ得ル若キ其他凡ソ實ニ要スル所ノ断言ト推
断シ得タル断言ト相異ナル若キ或ハ討論、演說、
誘說ノ際其要点ヲ論セズシテ反對論者ヲ嘲弄
シ或ハ訕毀スル若キ又或ハ一事件ノ正不正ヲ
決セントスルニ其便不便ヲ論シ或ハ毫モ論題
ニ関セズシテ只管人ノ情感ニ訴フル等ハ皆此
誤謬ナリ之ヲ例スレバ被告人ノ罪ノ有無ヲ論
ゼズシテ其罪ノ憎ム可キヲ論シ或ハ救恤ノ一
法ヲ勸誘スルニ其法ノ善キヲ説カズシテ救恤

ノ義務ヲ喋々スル等ノ如シ此類ノ誤謬ハ大抵
故意ニ出デ、之ヲ隱匿スルガ為ニ用井ル術モ
亦極テ多ク其方法一ニシテ足ラザルナリ
以上論スル所ハ誤謬ノ重大ナル者ニシテ揭示
セル例ハ極テ明白ナル者ナレバ人或ハ決シテ
斯等ノ誤謬ニ陥ルヲ無シトスル者有ラン然レ
氏讀者若シ善ク注意シテ世ノ論說、討論者ヲ觀
看シ又反顧シテ已レガ思考ヲ自省セバ其誤謬
ハ皆前述ノ四類ヨリ外ナラザルヲ發見ス可
シ

論理略說 卷之七 同盟會

論理略說 大尾 高田早也

明治十五年十二月十六日 板權免許
同十七年一月 刻成出版

編述者

菊池大麓

日本橋區蛸壳町三丁目十番地

出版者

青木輔清

同區濱町三丁目十番地

製本發兌

同盟會

同區濱町三丁目十番地



